

『医学と儒学：近世東アジアの医の交流』

向静静*著、人文書院、2023年

海原 亮†

近世日本（江戸時代）は、医が職分として成立し、医師の数的な拡大と巷間での活躍が始まったほか、学問の飛躍的な進化が達成された時代と評される。そのなかで17世紀後半以降、発展を遂げた古方派医学が既成の体系を見直し、医界における「復古」運動を醸成させ、当該社会のなかで大きな流れとなったことはよく知られている。本書は、復古を主唱した医師（四大家）後藤良山、香川修庵、山脇東洋、吉益東洞を軸として彼らの思想上の特質を明らかにし、近世医学史上に再 positioning を試みた画期的な成果である。

第一部「古方派医家の「復古」」は、四大家の学問（理論、治療法）について、古学を標榜した学者（伊藤仁斎、荻生徂徠）たちの人的ネットワークを念頭におきつつ論じる。

第一章「後藤良山の「古道」——「日用食品」・民間治療法の提唱」は、「一氣留滞論」を唱えた良山の復古思想の源流が、儒学の「孝」「仁」にあったこと、仁斎の「人倫日用」に影響を受けた点を指摘する。医学が日常卑近なものという理解から、思弁的な理論を排し、自らの古道を中国創世神話時代の聖人、庖犧（伏羲）・神農に求めたのである。具体的には神農が教えた五穀と野菜に加え、鳥獸肉の食用を推し、体を養う。また、薬物の「寒熱温涼」論を脱し、後世派医家が重視する「温補」法を批判、「順気」の治療をめざした。その過程で、民間の治療法も積極的に採用し、良山がとりわけ温泉・灸・熊胆を多用したことは周知の史実だろう。有益な療法ならば広範に取り入れようとする姿勢であり、『傷寒論』を特別視することはなかった（72頁）と指摘する。

第二章「香川修庵の「自我作古」——「日用」の医学全書の成立」は、修庵が儒学などの様々な学知を獲得する過程で、良山と同じく医学を修身の一環と理解し、日用として医を論じた、とする。修庵は従前の医論を痛烈に批判、「自我作古」を提唱して『一本堂行余医言』『一本堂薬選』などの医学全書を編んだ。これらは、高い実証性をもつものと研究史で評価されてきたが、彼自身の思想背景を踏まえた検討は為されていない。本章ではその欠を補い、引用文献や薬効論の特徴（和人参の勧奨など）を丁寧に整理した。要は日用の重視だから、『傷寒論』にも注目するし、後世派の曲直瀬道三も継承したのである。

第三章「山脇東洋の「述而不作」——腑分けの実施と『外台秘要方』翻刻」は、すべてを古典に求めた（述而不作）、東洋の医学思想をとりあげる。彼の事跡といえば、1754（宝暦4）年京都西刑

* 立命館大学立命館アジア・日本研究機構准教授

† 住友史料館主席研究員
umihara@shiryokan.jp

場における解剖が有名だが、その「最大の動機は、先行研究が指摘するような中国の医書に記された経絡・臓腑説と蘭方医学の解剖器官とを弁別することにあつたのではな」く（121頁）、五臓六腑説を否定する、復古の実践とみた。その目的ゆえ「彼の観臓は、客観的な観察とはなりえなかつた」（128頁）との指摘は、きわめて重要である。彼の復古への確信と蘭方医学への評価は、決して矛盾するものではなかつた（130頁）。『外台秘要方』の翻刻など、復古事業の達成は多くの儒者・医者との関係構造のなかで成立し、それがゆえに以降の古方派の展開、医界にも大きな影響を及ぼしたのである。

第四章「吉益東洞の「古訓」とその展開——「万病一毒論」をめぐる」は、東洞が自ら医説を補強するためどのような古方・古訓を用いたか、詳細に検討する。彼の主張、陰陽五行や五臓六腑の否定は医界に大きな波紋を呼んだが、そこで引用された中国古典は多種多様である（162頁）。東洞はそこから自説に合うものを周到かつ、作為的に選択した。たとえば、『呂氏春秋』からの抽出過程（166～171頁）、『傷寒論』への注目は艮山・修庵・東洋と比べれば「排他的で、偏狭な性質」（199頁）と評価されている。このような独自の姿勢に対しては医界から少なからぬ批判もあつたが、思弁的な医学理論への厳しい批判は、近代、さらには現代の東アジア世界へも影響を及ぼした、と述べる（200頁）。

続いて、第二部「東アジアにおける医の交流——『傷寒論』の研究と「実用」」を置く。

第五章「明清医学と近世日本医学——越境する医家たち」では、中国と日本のあいだを「越境」して活躍した医家の様相をうかがう。明清交替期に戦乱を避けるため来日した医師がもたらした医学知識が、わが国の学問全般に多大な影響を与えた事実は、医書（モノ）の伝来に関する膨大な研究がある。一方で本章は、ヒトと情報の移動に焦点をあて網羅的に検討する。例にひかれた北山友松子（?～1701）の事跡は実に興味深い。彼の父が唐通事・薬種商ゆえ中国の最新医学に接し得る環境で育ち、壮年以降は長崎から大坂へ出て活躍、『傷寒論』を重んじ実用の学を实践した。彼の学問は「まさに長崎で形成されていた中国人医家共同体のなかで培われたもの」（231頁）と評し得る。

第六章「『傷寒論』研究と東アジア」で検討する『傷寒論』は、いうまでもなく早くからわが国に伝えられ、医学・本草学に多大な影響を与えた医書である。今日でも漢方薬剤の多くが典拠とする。著者張仲景が「医聖」と称され、近世日本で高い評価を得たのも彼の医書の普及と関連するものだ。本章では『（宋版）傷寒論』の成立過程と内容を紹介、明・清時代中国や日本で同書がどのように研究されたかを検討する。とくに近世期に成立した同書の研究・注釈書は、現存するものだけでも400種に及ぶという。それは吉益東洞ら古方派の医家が『傷寒論』の内容を『黄帝内経』の世界観から分離させ、独自の発展を促した結果といえる。章末には『傷寒論』関係書の渡来目録が付せられる（260～261頁）。

第七章「『傷寒論』の「実用」——麻疹・痘瘡・腸チフス・風邪の治療から」は、わが国で『傷寒論』が実際どのように援用されたか、具体的な例をうかがう。たとえば、近世期に何度も流行した麻疹は、後世派医家が「温補」を偏重したが、対応できない場合がある。これには「今日日用」に立脚し、『傷寒論』を重んじた吉益東洞が批判を加えた。つまり、親試実験の成果を踏まえ、簡易な処方集を公刊したのである。古方派の実用を重んじる姿勢こそが、当該社会に『傷寒論』を根付かせた背景といえる。当該社会の疾病、課題に即応し、治療法を模索するなかで、医学それ自体のありようも変質を遂げたと結論付けられよう。

* * *

以上、向氏による重厚な研究の成果を短くなぞってみた。評者の理解が足らず不十分なまとめになった点はどうかご了承ください。続いて本書刊行の意義と、研究史全体に関わる若干の課題について、三つの視角からまとめておく。

第一に、本書最大の成果は、近世医界に多大な影響を及ぼした古方派医家を取りあげ、書名にも掲げられた「医学」と「儒学」の関係を精査した点にあることだ。

序章でも意図的に示されたように、儒医研究は長らく研究史上の課題ながら、近年は本格的な分析がみられなかった。また、近年は医家の事跡を医学という分野のみならず、他の学問動向や社会全体との関係構造のなかで理解するのが主流である。近世の医家が「基礎教養として儒学を学ぶ過程において、ほかの儒者と深い人的ネットワークを構築し、学問的にも多大な影響を受け」た（18頁）とする視点は、本書の議論の前提としてまったく相応しいものといえよう。

本書は、古方派医家について言及された膨大な研究蓄積を見通しつつ、「復古」思想の多様性を指摘している。「今日の視点から一見「近代的」に見える側面が彼らにあるとしても、彼らは自覚的に「近代化」への道を歩んだわけではない。あくまで彼らを突き動かしたのは、それぞれが正しいと考えた「復古」主義であった」（19頁）とされた点は、評者も大いに首肯するところだ。当該社会における「科学」とは何か、あるいは「近代化」論とされた従前の学説を再考する試みとしても評価されるべきだろう。付言すれば、近世後期に隆盛を迎えた「洋学（蘭学）」の特質も、医界の奔流のなか如何に組み込んで理解すべきか、研究史に重要な論点を投げかけている。著者は「近代科学」を参照軸とした西洋医学中心的な見方（いわば医学的「進歩史観」）と、「復古」の内容を「『傷寒論』への復古」に限定するような概括的見解から古方派を解放する（30頁）というが、この表明こそ本書のオリジナリティであり、学界に有益な提言と感じた。

また、評者がとくに興味を抱いたのは、第三章で山脇東洋の腑分け＝解剖実験を「述而不作」の思想から再評価した点である。東洋にとって医学は先人のそれに忠実たるべき存在ゆえ、腑分けを通じて「絶対座標」としての『周礼』の権威を証明しようとした」（121頁）と評する。『周礼』の「疾医」によると、脈を診て九蔵の活動を測知し、病状を断ずることが求められる（125-26頁）。人体の臓器が九蔵であることを確認し得た点に腑分けの意義をみる視点は、もとより以降の解剖実験（小石元俊など）が有した意義とは弁別する必要があるだろう。山脇東洋の思想は、同時代の儒者たちが形成した学問環境のなかに根付いていた。彼もまた西洋の解剖書を所有したが、その影響は極めて限定的だと評する（130頁）。永富独嘯庵の蘭方医学理解にもふれられたように（143-45頁）、漢・蘭「折衷」の様態こそ近世医学の本質たることを本書の検討からは十分に理解できる。

ところで終章は、本書の検討結果を踏まえ、復古の多様性について整理している。「彼らが唱える「復古」とは、古代に忠実であることでも、教条的に古典に従うことでもなかった」（298頁）とし、従前の古方理解に一石を投じるが、評者としては、古方派の医学が後世派に対するアンチテーゼとはいえない、とする著者の見解に注目したい。それは「現実問題を解決するための模範であり、理想として措定されたもの」（298頁）だったが、それではなぜ彼らが『傷寒論』など張仲景のテキストに依拠したのか。この点は、著者の抽出する「儒者・医家間の深い人的ネットワーク」（301頁）のさらなる考究のなかで、よりクリアに描き出されることだろう。

第二に「東アジア（漢字文化圏）」からみた近世医学という視点である。本書の後半、第二部で為された検討は、既存の医学史の範疇^{はんちゆう}を大きく超え、当該期東アジア世界という広い視座を対象に入れた。

第五章では、中国（東アジア）と日本とのヒト・モノ・情報の移動を検討している。もとより医の専門的な知識・技術は、書籍という形あるもので普及する以上に、実際には個別的な人間関係のなかで広まる性格が強い。この事実は、近年の文化史・学術史研究で強く意識されている点である。敢えていうなら、情報が拡散し得る「空間」「場」の実態解明（教育機関や、公儀による就学の制度など）も課題となる。本書で為されたのは国際都市長崎への着目である。長崎を拠点として最新の学問がもたらされる当該期の社会構造の検討は重要な論点となり得よう。

長崎は対中国、国際社会への窓口であり、唐通事に加えて、国際交流・学術史の分野で膨大な先行研究の蓄積がみられる。北山友松子の例（225-30頁）はきわめて示唆的で、『長崎先民伝』（若木ほか、2016）「北山道長」項から彼の事跡をみれば、長崎に流入した東アジア発の学問が、大坂を経由し全国へ拡散したうえ、既存の学問をアップデートする構造がみえてくる。これこそ近世医学を規定する特質といえるのである。

第六章のほか、本書全体の課題として示されたように、東アジアにおける医学の双方向交流の実態解明は今後、著者が為し得る作業と推察する。その成果に期待したい。

最後に、第二の点とも関わるが、学問の「流通」という側面に着目した点を掲げたい。

著者の指摘「そもそも『傷寒論』の解釈の担い手が医家であった以上、彼らの作業は、目前の疾病に対する医学的実践と不可分なはずである。それにもかかわらず、近世日本における『傷寒論』受容を扱った従来の研究は、こうした実践との関係が十分踏まえていないのではないだろうか」（268頁）との見解は、今後、学界全体で問い直すべき課題であるはずだ。

近世中期以降に顕著な『傷寒論』注釈書の盛行、実用の流れは、つまるところ、古方派医家の提唱した「今日日用」実践の結果だった。医学書の注解という従前の姿勢を脱し、臨床場面での援用を想定して簡易な処方集・薬物書を公刊する。また「加持」「祓除」のような対策をも医学から排除する彼らの『傷寒論』への依拠は、単なる古典への信仰ではなく、こうした問題意識への適合性から選択されたと指摘している（279頁）。

古方派医家が日用を重んじたからこそ、学問「流通」の具体像が問われる。もっとも、その過程については実証の素材とする史料の選定が難しく、先行研究を眺めても成功例は限られるようだ。史料の博捜はもちろん、分析の方法論を鍛えることが喫緊の課題となる。医学史研究についていえば、テキスト（医学書）の内容分析は膨大な蓄積がある。実際にそれらがどうやって巷間に援用されたか常に考究する姿勢が求められるし、その延長上に学問の本質もみえてくるのではないか。本書で為された試みはその稀有な成功例と評価できる。

参考文献

若木太一・高橋昌彦・川平敏文編（2016）『長崎先民伝注解』勉誠出版。